

屋久島フィールド調査

激甚災害と年代測定グループの木村勝彦（福島大学）、佐野雅規・平峰玲緒奈（国立歴史民俗博物館）、篠崎鉄哉（東京大学）、奥野充（大阪公立大学）は、2025年6月3日から6日に、鹿児島県熊毛郡屋久島町の宮之浦川、永田川、一湊川周辺にてフィールド調査を行いました。

屋久島は、九州最南端の佐多岬南南西約60 kmに位置し、その最高峰は花崗岩からなる宮之浦岳（標高1936 m）で、標高差による亜熱帯性から冷温帯性までの植生変化や縄文杉などのスギの巨樹を含む原生林がユネスコ世界自然遺産に登録されています。宮之浦川、永田川、一湊川には、九州と屋久島の間海域にある鬼界カルデラで発生したアカホヤ噴火（約7.3 cal ka BP）に関連した軽石質堆積物（写真①、②）が分布し、そこに未炭化の樹木が埋まっています（写真③）。本調査では、樹木年輪に記録されている情報をよみとり、完新世（最近約1万年間）最大の噴火であるアカホヤ噴火の年代などを詳細に調べます。なお、河川中には最近流れてきた倒木も確認されており（写真④）、これらは分析対象から除外する必要があります。なお、屋久島地学同好会の中川正二郎氏には、現地の情報提供など現地調査をサポートいただきました。



写真① 宮之浦川の右岸（写真左側）に沿って露出する軽石質堆積物。左岸には主に花崗岩からなる円礫が堆積している。



写真② 軽石質堆積物の層相。火山灰の基質に粗粒な軽石が乱雑に入り、樹木片や樹幹跡の穴も見られる。



写真③ 水中の軽石質堆積物中に埋もれる倒木。水中カメラで産状を確認した。



写真④ 宮之浦川左岸にみられる流木（写真中央）。軽石質堆積物ではなく、円礫に埋もれていたため、最近の流木と判断される。（撮影：中川正二郎）